

史遊サロン通信

No.251号
平成28年
3月5日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

三月十九日(土)は『史遊サロン』の日です

今月の十九日(土)は、新しい『史遊サロン』の初会合です。どんなスタイルになるか、期待しています。なにしろ、「会費なし」、「執筆義務なし」、「発表義務なし」ですから、そうすると「出席義務なし」に繋がるかも知れません。しかし、それでも良いと思っています。

実は『史遊会』の歴史をたどると、平成五年九月に一度「解散」したことがありました。しかしそれはどうやら「解散」ではなく、組織を再編するための「休会」だったようで、平成六年二月から予定通り「再開」となりました。

その再集合の時「……講演会はなく、またとくに派手な催しはありませんが、会員相互の理解と親睦を深めるための懇親会にして」と案内がありました。

その頃は、わたくしは「新人」でしたので、事情は良く分かりませんでしたが、想像を交

えて言えば、幹事さん達がムキになり過ぎて、「疲れはてた」ためだったようです。

今回と事情は異なったでしょうが、より良い史遊会を目指す、幹事さんは非常に疲れ、時にはそれが「不満」になります。そのため、だんだん幹事に「なり手がなくなり」、時には幹事さんが孤立感を味わうことになりました。そんな背景があり、私が幹事を担当した五年間は「力まず省力型で、ひとり幹事的に」割り切った運営をしました。

「出席者が五人をきつても良いではないか」「一対一」でお話すれば、すばらしい方ばかりが五人も集まる会ではないか。

もしかしたら、史遊会サロンのように、「会費なし、執筆義務なし、講演義務なし」の会は、かえって新たな参加希望者が、増えるかも知れない。実は、そんな「ハシリ」があり、

三月の例会には、新顔が現れるかも知れません。

さて、新たな『史遊サロン』の活動について、ご報告すると、『史遊会通信』第十一集(二〇一五〜六年、二百四十一頁)の印刷が出来上がりましたので、今号と一緒に送ります。五十部刷って、印刷・製本代が三万円、郵送料が一万円ほどでした。安いですね。

『史遊会』との関連で「個人的なエッセイ集」などのご希望があれば、会の費用で編集・印刷・製本のお手伝いをする予定とお知らせしたところ、四件ほどの申込みが期待できそうです。

なお、『史遊サロン通信』は、新規に第一号からスタートするつもりでしたが、折角の歴史ある『史遊会通信』なので、それを継承して二百五十一号から始めます。

三月例会では千坂精一さんが『上杉綱勝急死事件』について、話題提供して下さる予定です。概要は二百五十号を参照して下さい。

日時 三月十九日(土)、三時から五時

場所 銀座ルノアール八重洲北口会議室

東京駅北口通りのSMB C日興證券の
並び、徒歩三分。

新井宏 記

釈尊・玄奘の御真骨発見と異聞

諸橋 奏

仏教の歴史、その発生と伝播・教え等については、二千数百年の間における弟子・仏教者・仏教家により詳細が語られてきており、今更、言をさしはさむ余地もないことから、一般的に知られている財団法人仏教伝導教会の『仏教通史』要略を記す、と。

中インドに生まれたブッダ・ゴータマ(釈迦牟尼)は正覚を成就。西暦前五世紀なかばころより、死に至るまで四十五年間、智慧と慈悲の教えの伝道説法の生涯であった。

その教え(仏教)はアショーク(阿育、在位西暦前二六八〜二三二)王の時代、国外にまで伝播された。

そして紀元前後のころ、東方へ伝播して「大乘」が生まれ、ナーガールジュナ(龍樹)の思想的活動が展開された。

中国・日本の仏教も、その大乘仏教で、それはブッタ・ゴータマの教法の系譜につながりながら、大衆の救済を第一に、の思想を強調するものであった。

中国が仏教を知ったのは、紀元前二世紀末ごろ、西域を通してで、シルクロードは貿易路であり、仏教の道でもあった。

中国の仏教受容は、教典の招来と翻訳を主とし、紀元一四八年ごろから一七一年ごろ、安世高が、そして五世紀はじめ、龜兹(新疆ウイグル自治区地方)から来た鳩摩羅什で一つの頂点に。

入竺求法僧の先駆者は法顕(三一九〜四二〇?)、有名な玄奘(六〇〇〜六六四)の入竺は六二七年、帰国は六四五年で、玄奘により中国の經典翻訳は更なる頂点に達した。因みに鳩摩羅什に代表される翻訳を「旧訳」、玄奘以降のものを「新訳」と呼んでいる。

彼らの思想的・宗教的活動は中国独自化を強め、天台宗で顕著に、更に禪宗に至って極まったといわれる。禪宗の初祖は菩提達磨(五二八)で、それは「中国人の仏教」であった。

日本仏教は、五三八年、欽明天皇に百済の王が、仏像・経巻を献じたのが伝来の始まりで、長い歴史の中に三つの焦点があった。

第一期は七・八世紀、法隆寺の建立(六〇七)から東大寺の建立(七五二)の時代。寺院は国際的文化の中心、僧侶は新知識のリーダー、經典は優れた思想の乗物であった。

九世紀、最澄(七六七〜八二二)・空海(七七四〜八三五)が現われ、平安仏教とよばれる初めての日本仏教の宗派を創設、山中修業の根本道場を確立、以後三百年余、二人の流れ天台と真言が、朝廷中心に栄えた。

第二期は十二・三世紀。法然(一一三三〜一二二二)・親鸞(一一七三〜一二六二)・道元(一二〇〇〜一二五三)・日蓮(一二二二〜一二八二)などによる仏教の日本的受容であった。

以後の日本仏教はそれらの仏教者たちの基盤上に余栄を保って今日に至った。

だが、日本仏教の歴史にもう一つの焦点が。それは近代の仏教学における原始仏教の研究成果である。

なお、日本人の仏教受容に関しては、三つの要件「山岳信仰・他界・浄土観・遺骨信仰」という日本民族の信仰が、陰に陽に、相互に影響し合って発展し「国民的宗教」としての日本仏教が形成された、と宗教学者山折哲雄は指摘している。(『仏教とは何か』中公新書)

ところで、名古屋に仏教の国際的寺院「覚王山日泰寺」がある。案内書によると、

釈迦の死後二五〇〇年の間に、一度だけその遺骨が発掘された。一八九八年(明治三十一年)英領インドのヒプラーワーでのこと。発掘

したのは英国人ウイリアム・ペップ(イギリスの駐在官)で、骨壺に刻まれたインド古代文字解読により仏骨と分った。インド政府はその仏骨を仏教国タイに贈りその一部がタイ国王チュラロンコン皇帝(在位一八八八〜一九一〇)より日本に贈られた。この仏骨をお祀りするため、日本仏教全宗派が協力建立したのが日泰寺で明治三十七年(一九〇四年)のこと、覚王寺と言うのは「覚りの王」釈迦のこと、日泰寺とは日本と泰国の意味。

タイ(泰)国の国名に変更されたのは昭和十四年十月三日。それまでの国名はシャム(暹羅)国。従って当初は山号は覚王山、寺号は日暹寺(日本・暹羅)として誕生。

また、御真骨を安置する「奉安塔」はガンダーラ様式の花崗岩で高さ十五メートル、大正七年(一九一八年)に完成した。

この釈尊のご真骨発見は、当時十九世紀の西欧では、釈尊は実在の人物でなく太陽神話の一形式との見方が一般的であっただけに、「十九世紀東洋史上の一大発見」であつた。

ただ銘文の解読については「ブツダ世尊の遺骨」と「親族である釈迦族の遺骨」とに学者の意見は分れた。「覚王山日泰寺略記」は「これは仏陀世尊の舍利(骨)を納める器であり、

栄光ある釈迦族の人々とその兄弟姉妹妻子たちのものである」と記している。

ところが…

「一九七一年(昭和四十六年)からインド政府考古学局がピプラーワールの再発掘を行い、一九九六年(平成八年)その最終報告書を公表。それによるとこの古墳には三度の増築が行われており、ペップが遺骨を発見した地層は第二期の舍利塔であつたことがわかった。そしてさらに下の地層にはレンガ造りの本来の舍利塔があり、その中から火葬した遺骨の入った壺が二つ発見された。(中略)ペップの発見した舍利容器は舍利塔増築時の複製品だったのか、あるいは親族の遺骨なのか」(吹田隆道著『ブツダとは誰か』春秋社)と。

考古学の世界は常に新発見の研究成果の宿命を負っていて、それ故に興味深い分野といえよう。

仏教の重要人物の一人である玄奘三蔵法師(六〇〇年〜六六四年、一説に六〇二年〜六六四年)の御真骨についてもまた異聞が。

三蔵法師の霊骨発見には次のようなエピソードがあつた。

『三蔵法師と慈恩寺』(大島見順著 平成二十一年七版)・『武州岩槻 玄奘塔ものがたり』(久保田士朗著 二〇一〇年初版)によると

昭和十七年、第二次大戦さなか、南京を占領していた日本軍の高森部隊が、稻荷神社建立作業中、塔の貴部を発見、発掘の結果石郭(厚さ十五センチ、長さ百六十センチ)が出土。内部に北宋時代(一〇二七年)、明時代(一三六六年)記の葬誌と玄奘三蔵法師の頂骨が納められていた。「大唐三蔵大偏覚法師玄奘ノ頂骨ヲ、長干寺ノ演化大師が長安カラ伝ヘ得テ、此処ニ葬ル」と彫られていることから三蔵法師の霊骨と判断された。そして発掘埋蔵品は全て直ちに南京政府に返還され、昭和十九年十月十日、政府は供養塔の落慶式典を執り行い、玄奘の頂骨の一部が日本仏教徒に贈与された。来日の霊骨は、大戦末期で米軍の空襲激しき折柄、安置場所を二転三転、疎開先を岩槻の慈恩寺に求めて十九年十二月十三日に奉安された。

昭和二十年八月十五日の敗戦では、霊骨占領品論議が起つたが、新中国蒋介石主席の「返還には及ばない。むしろ中日提携は文流にあり、日本における三蔵法師の遺徳の顕彰はまことによろこばしいこと云々」との友交的意

向により、正式に慈恩寺の地に靈骨塔建設が決定、東武鉄道の根津嘉一郎社長の十三重塔寄贈もあつて、二十五年三月二十日工事完了、二十八年五月玄奘塔建塔落慶式が行われた。

その後三十年には逆に台湾省仏教界からの要請があり分骨、更に五十五年、奈良薬師寺へ分骨して現在に至っている。

ところが、近年の中国での研究で「旧日本軍の三蔵法師の骨、南京で発掘」説に異論が出されたと二〇〇七年(平成十九年)一月一日付朝日新聞は次のように報じている。

異論「記録なく、別人」を唱える中国陝西省(せんせい)社会科学院哲学研究員を務めた陳景富氏によると、

「南京の頭骨」に関する主記録は三例、①旧日本軍が発掘した石棺の銘文(先述)②「九八八年に僧の可政が終南山に行き玄奘の頭骨を入手。(南京に)塔をつくった」(宋代の歴史書「健康志」)③「南京の可政和尚が、玄奘の頭骨を長安の終南山の紫閣寺で入手」(元代の歴史書「金陵新志」)。陳氏は「黄巢の乱(八七五〜八八四年、唐末の農民の反乱)では「塔は破壊されなかった」と結論づけ、南京の頭骨は玄奘のものではないと主張している、と。

ところで、二十一世紀に入ってはや十五年余、パラダイム(人間が根本的にもっている思考や認識の枠組み)世界観は情報化・グローバル化などの社会変化も加わり、転換(シフト)を迫られているといわれている。

これは「西洋科学における世界観が近代において『機械論的』に行き過ぎ、それが今日われわれの社会全体が抱えている諸々の危機をもたらししており、人類が生きのびるためにはあらゆる分野において新しいパラダイムに転換されなければならない。そしてその現代科学が示す新しい世界観が『東洋の宗教的世界観に非常に似ている』との指摘が。(日本実業出版社『パラダイム・ブック』評 東北大学生新聞)

因みに東洋の宗教的世界観についていえば、まず日本の古神道・かむながらのみち(唯神の道)「神道は日本民族の形成以来、自然に対する独自の感受性をもとに、目に見えないカミの働きへの崇拜を育てたが、開祖や教理はもたなかった。むしろ、カミをまつり、禊祓(みそぎ はらえ)を行つて心身を清浄にする、素朴な儀礼に基づく民族宗教であった」(山折哲雄『イミダス』⁹¹宗教)。「自然は神慮のまま」と感受していたといえよう。

仏教は紀元前五世紀、インドの王子ゴータマ・シッダールタ(釈尊・仏陀・釈迦牟尼)が興した。釈尊の生存時代については欧州ではスリランカの歴史書を重視し、その誕生を紀元前五六六年、入滅を紀元前四八六年としているが、日本の研究者は文献学上「北方伝承の仏滅からアショーカ王の即位算定の紀元前二六八年までを百十六年とし」誕生を紀元前四六三年と考えている。

釈迦時代の仏教、原始(初期)仏教の教えは悟りに至るまでの四つの真理「四諦」、この世の苦をひらくための八つの方法「八正道」としてまとめられる(『図解日本の仏教と宗派』宝島社)。釈迦入滅後百年経ったころ、上座部系統はもっぱら修業と禁欲により自己のみの完成を目指す立場をとる仏教としてセイロン、ビルマ、タイなどの南方に伝播(南方仏教)。一方大衆部からは大衆の救いを第一に考える、在家信者を中心とする大乘仏教が成立。中国、韓国、日本、チベット、モンゴルなどに伝播(北方仏教)した。

原始仏教から上座仏教(一九五〇年、コロンの世界仏教徒会議の決議で小乗とはいわないことに)をへて発展し最高形態に到達したといわれる大乘仏教には二大系統がある。

一つは中観派といわれ、竜樹^{りゅうじゆ}を祖とするもので空を教義の中心(根本真理)とし「一切の事物は縁起により成り立っており、永遠不変の固定的実体がない」と考える系統。

もう一つは唯識派といわれ、世親^{せしん}(天親^{てんしん})(四〇五世紀ころの北西インドの僧)が大成した説で、「唯識とは心のほかに法(存在するもの)がない、人間の心にあふれて初めて世界が生じる」という考えである。しかし、この大乘仏教もインドでは滅び、中国・朝鮮では形骸化し、日本でのみ仏陀の心から生まれた大乘仏教の理念「慈悲(思いやり)」「すなわち本来「四苦八苦」の苦で出来ている人生から苦をなくす教えとして生きているというのが実情であろう。

中国仏教はともかく、中国の宗教的世界観を代表するのは儒教と道教である。

もともと儒教は「宗教としてよりは社会道徳や政治倫理として」受容されているが。儒教の祖は孔子(紀元前五五一〜紀元前四七九)である。孔子は中国古来の思想家を尊崇してこれらを大成、仁を理想の道徳とし、孝悌と忠恕とを以て理想を達成する根底とした。忠恕とは「まごころとおもひやり」で、仁を天

道の発現とみなし、一切の諸徳を統べる主徳とした。

一方、道教は儒家と共に中国の二大学派をなし、その祖は老子(春秋戦国時代・紀元前七七〇〜紀元前二二二)で、「宇宙の根本原理(本体)を道(タオ)とする教説が根本をなし、道は絶対的であるとし、清静・恬淡・無為・自然に帰すれば乱離なし」と説いた。後に老子の学は莊子(紀元前四世紀ころ)が継ぎ「万物は斉同で生死などの差別を超越する」ことを説いた。

いずれにしても東洋の宗教的世界観は「自然を目に見えないカミの働き」と感受し、「誠者天之道也。誠之者、人之道也。」(中庸二十章)と知見する心の働きを根本としているといえよう。

科学論文データの信憑性について

高橋 正彦

【旧来会員の逝去相次ぎ、会存続の意欲減衰の現状に鑑み、往年の主張を示します。】

実業界を引退した方々が、この様な学びの場を開いているのは、現状の文化レベルに満足せず、何らかの提言を為したいの思いがあるものと想像する。それは端的に言えば、

【文化学術水準の形骸化の現状】に対する【危機感の発信】ではないだろうか。

ところが、如何に「我に正論あり」と主張しようとも、訴求力ある発信なければ、会員数もジリ貧となり会は消滅する。……是に対し、限られた環境下でも超弩級の(訴求力ある)、真実の発見は可能である実例を以下で示そうと思う。

A 当世科学の限界状況

論究の多くが実データを開示しない、現況の情報【粗略データ】に留まる。是は体裁が悪く余人は使用不能、高度の検証・発展的論考は出来ず研究不正の素地がある。

B 是に対する本論の基本的着眼点

① 簡略データであろうと、是等を広汎・綿密に対校し、ここに未知の法則性が【潜在】する場合に、この法則性には信憑性がある＝帰納法的視点。

② 類似事象に関し、異質の検証環境にも拘わらず、双方のデータ群に、類似パターンが意図せず【潜在】する場合、両者には信憑性がある。

C 本論の要旨

鉛の環境汚染は放射能汚染に匹敵するが、そのメカニズムに論究はない。二十世紀の本邦鉛汚染はN字状の変移を描き、米国のそれに酷似する。

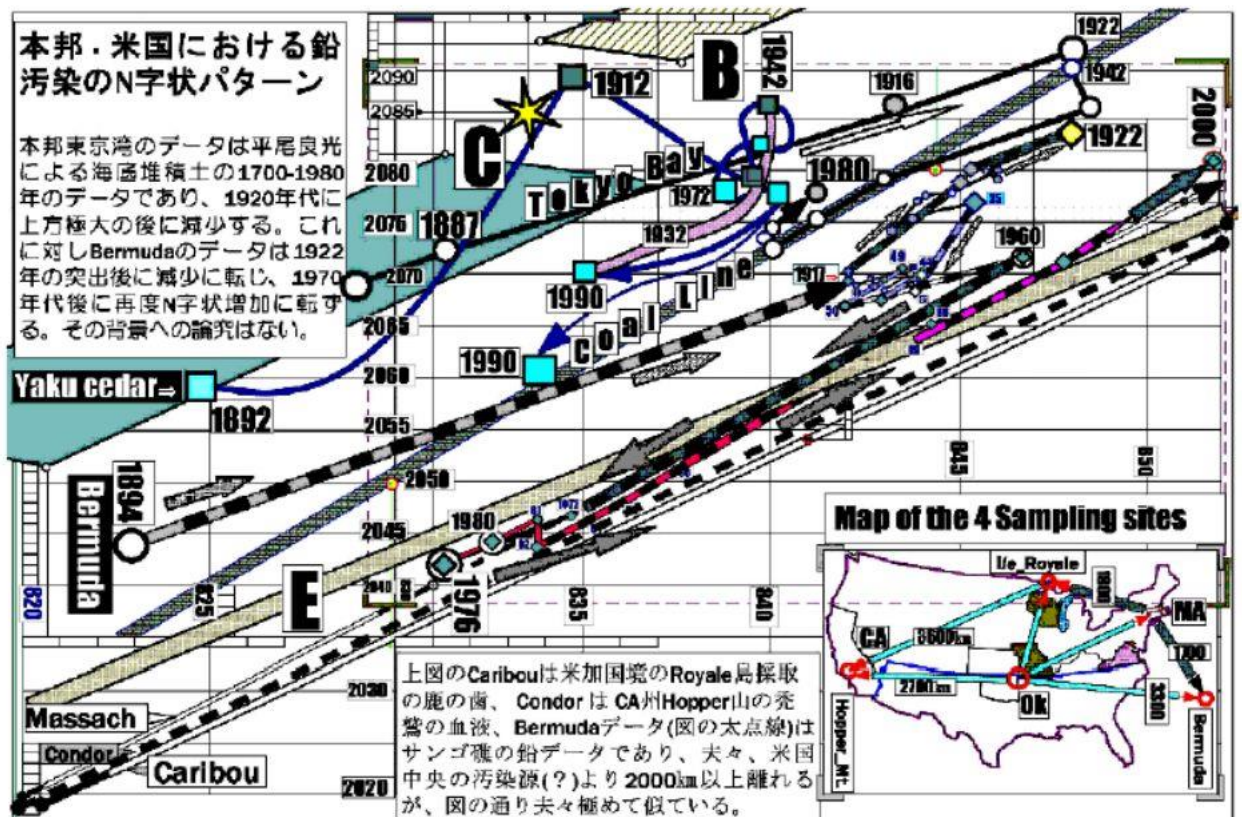
これ等パターンの類似は単独では信憑性が認められず、【亜鉛由来の鉛汚染】説の導入により、初めて意味を持つ。

更にこの新視点は、本邦南の屋久島の年輪(注1)により、初めて意義が与えられる。

D 論議 (N状変移)

(便宜上、N字パターンの左上角点を【左角】、右下角を【右角】と称する。)

又、鉛データの分布領域で、神岡鉱山・本州鉱山・北米特有の分布を図上で、【B】【C】【E】の矩形領域で示す。



上図において、バミューダ(サング礁)データは一九二二年を頂点とし…六〇年より左方に減少するも、【一九七八年より漸増に転じた】。

これに対し東京湾推積土データ(平尾説)は一八八〇年代より漸増に転じ、一九二二年より漸減に転じ、【一九七六年より再度漸増に転じた】。

但し、平尾説は海底面ⅡQ80の測定値を一九八〇年の代表値とする(河口先は鉛値が低い)が、全一八点の平均では七一年以降は「漸増」となる。平尾説はこの点が不明瞭である。

同様に、本邦諸家の測定で、一九七〇年代以降の鉛汚染の傾向に明確な言及＝定説はないが、【一九七〇年以降の鉛値は漸増に転ずる】

(是は先に提示のテーゼの①によるが、スペースの都合で説明は省略する。)

……本邦のN状変移の、【左角点

は一九二二年・右角点は一九七一年】である。

●N状変移の要因……について論究はないが、是に関し、屋久杉年輪に興味深いデータがある。……是によれば、産業革命以前、大気中の鉛汚染はC領域内にあったが、一九一二年に値が急増し、以後はB・C領域の脇に線状に分布するようになる。これ等の変移は以下の様に解釈される。

————————————————————

- ① 屋久杉年輪の年代設定には信憑性がなく、一九一二年は一九一六年に補正する(注)
 - ② 産業革命期の大気汚染は、本邦おける英帝国圏由来の鉛の優位を全く反映しない。
 - ③ 一九一二年の値は以後の分布とは異質でB・C領域外の、華南産鉛と推定する。(★印) 凡口鉍山の鉛値……(2110.4-8535)
 - ④ これ等より屋久杉の一九一二年の値は第一次大戦……一九一六年の鈴木商店による下関彦島の突貫的な亜鉛増産の事実を示すと解釈する。
- (増産の鉍石調達先として華南を挙げるのは鈴木商店に関する記事のみである。)
- ⑤ 亜鉛精錬と大気中の鉛汚染を関連付けた論調は目にしないが、初源的な亜鉛精錬で

は、不純物として鉛が排気拡散されると類推する。

●東京湾の鉛汚染の新視点●

東京湾の鉛汚染の(上図)、一九〇〇年頃に対する一九一六〇二年の急激な伸びは異質な鉛成分の混入によるが、当時の本邦の鉛消費の圧倒的な大英帝国圏のシェアを全く反映しない。

これは急激な亜鉛原鉍の需要に対し、B領域の鉛由来の汚染に加え、関東圏では、

●【北米産の亜鉛鉍に由来する大気汚染が進行した事を示す】。是は本邦A・B領域と異質で、突出部はE域に傾く。更に

●【東京湾の鉛同位体値は一九二〇〜四〇年の間で停滞する】……これは屋久杉の場合に近似する。同じ停滞はバミューダの値(図)にも見られる。

●北米の鉛汚染の新視点Ⅱ左角突出●

北米の鉛汚染の鉛値(注2)が一九一七〇二二年にかけて急に増加し、次いで急減する背景として、豪州タイプの鉛鉍山(モンタナ州鉍山)の影響が挙げられる。但し是は新しい鉍山で産量の急減はないから、鉛値の一九

二二年以降の左下への急減は説明できない。そこで、ピークを構成する原因は、第一次大戦による米国産亜鉛の激産による国内産亜鉛鉍の不足を、輸入により補った事にあると考えられる。

具体的には【第一次大戦の三年間は亜鉛鉍の不足分を輸入により補充した】との記述がある(注3)。

その輸入先はカナダとメキシコであり、この場合、両者の鉛値は北米より高いので、総合された鉛値は、これらの鉛値の影響により、【一九一六頃から右上方に】突出する。

更に、戦後の急激な生産縮小により、これ等の影響が減少し、鉛値は【一九二二年頃から左下に】急減する。

●北米の鉛汚染の新視点Ⅱ右角突出●

北米の大気汚染は一九六〇年代から、別異の分布線Ⅱ北米鉛線に「移乗」し、以後この線上を左方に減少し、右方増加に転ずる。ところが、【この増減の背景は、恰もガス鉛の増減であるかに見られるが、真実ではない。】

……何故ならば、単に濃度減少ならば、最終的に背景汚染であるCoal線へ移乗する方向に変化しなければならない。真実は、Gas添加鉛の【北米産からカナダ産への変

質】Ⅱカナダ産への転換(Gas 鉛産地の転換)であるが、米国ではこの事実を明示する説及び記録がない。

D 日米の鉛汚染 Line の信憑性

以上に挙げた日米鉛汚染の N 字状変移は、一九〇〇年代から一九一六～二二年代にかけて、旧来の鉛汚染と異なる【異質・急激な汚染】が突出した。その要因は第一次世界大戦による軍需(弾薬用) 亜鉛の精錬に付随する鉛汚染である……と抽象する事が可能で、ここで【日米で全く異なる環境にも拘らず、酷似する N 状変移の潜在が確認された】。

このパターンの類似に既存学説上の指摘はなく、ここから各測定データの「結果への予断」はなく、データの凡そには信憑性がある。

—————

● N 状パターンの問題点

但し、N 状パターンの異質環境下での類似はデータの全てを確証する物ではない。

①屋久島データには計測年(一九九二年は当方の推定)を示さず、図と表の年次も一〇年の齟齬があり、屋久杉の年輪計測への説明がない。そこで年次には【四年の誤りあり】とする。

②バミューダデータの一九七六年以降のラインは北米産鉛のライン上にあり(Ca 州のコンドル・国境北限のカリブー、Ma 州年輪の各鉛値のラインに近似)、凡は信憑性があるが、大きな疑惑がある。……何故ならば、

A…Pr. Boyle 一門から「師のデータと方法」に基づきながら、異なる鉛の変移図が提示されている(注4)。その差は N 状変移の右端が【北米鉛線に近い、やや離れるか】であり(後者では E 域線の直近に表示される)。

B…後者の場合北米 Gas 鉛汚染の度合いが若干軽減されるかの印象を与える。

C…Pr. Boyle 等 M I T の諸論文は素データを示さず、一九七〇年部分に抜けがあり、信憑性に疑問がある。抑々 M I T の経年変移図は縦軸($y=208\text{pb}/207\text{pb}$, $x=206\text{pb}/207\text{pb}$): 横Ⅱ年次方式で、【この方式では本図の様な同位体変移線の順行・逆行が認知されず、汚染のバックグラウンド・北米鉛の分布線も認知できない】。

D…そもそも降雨・血液等の標本に、鮮明な【加州・米国特有の直線分市がある】との本論図の主張は米国論文では顕著ではない。

(注2) Lead isotope … M. K. Reuter, Boyle 110011

(注3) 鉛生産データの概要(米商務省一九二九)

(注4) G. T. Chen - Thermocline…一九八八

「提言」階級固定化する社会では、獨創性・真実を見る目が失われる。これを打開するには web による情報発信を手にするしかない。

(追伸) 図中表示の都合上、本邦関係の図・データの真の位置は…縦 $y+20$ 、横 $x+25$ だけ移動した位置にあります。

洛陽発見の三角縁神獸鏡に

奇妙な鍔コブ

新井 宏

今年一月、大阪で「鉛同位体比から見た三角縁神獸鏡」と題する講演会を行ったところ、百人ほどが集まった。その時、冒頭、つぎのようなことを述べた。

富岡謙蔵が、三角縁神獸鏡が魏鏡であると唱えてから間もなく百年になるが、昨年は、「三角縁神獸鏡の製造に関する実証的な研究」が大きく進展し、「魏鏡説」が大巾に後退して「国産説」が決定的となった年であった。

年末には読売ホールで開催された樞考研の大講演会「三角縁神獸鏡研究の最前線」で、「舶載鏡」と「仿製鏡」が同一の鋳型を用いて造られていた事例が豊富に報告され、「仿製鏡」も「舶載鏡」も同一地域（日本国内）で製作されていたことが判明した。また、鈴木勉氏の工芸文化研究所も、鏡の加工痕の研究から「国産説」を決定付ける報告を提出したからである。

このように、近年「科学的な実証研究」が大きく進展しているが、その中で私の「鉛同位体比の研究」も大きな役割を果たしてきた。

そもそも青銅鏡には、複製する方法がたくさんある。「同型鏡」がほとんど存在しない中国ならともかく、三角縁神獸鏡は「同型鏡」ばかりで、しかも日本のみで五五〇面も出土した大流行の鏡である。流行地に「偽物」が現れるのは常識であり、「複製鏡」の製作状況を実証的に調べないで、従来のように紋様、銘文の系譜を精緻に追いかけてもコピー鏡やイミテーション鏡の製作地が分かるはずがない。

実は、ほぼ時を同じくして、昨年末、「遂に中国で三角縁神獸鏡が見つかった」というニュースが朝日新聞で報道された。河南省在住の鏡コレクターで研究者の王趁意氏が「二〇〇九年ごろ、洛陽の骨董市で白馬寺付近の農民から譲り受けた鏡」で、実見した西川寿勝氏も様々な特徴が日本出土の三角縁神獸鏡と一致していて、様式的には間違いなく「三角縁神獸鏡」だという。従前ならここで『魏鏡説』に決まりと大騒ぎするところであるが、

『国産説』が有力になった今日では研究者達も慎重である。

私も一応のチェックをしてみたが、出土地不明ではあるが、中国鏡らしく直径が十八・三センチで日本では珍しく小型サイズなので「本物」の可能性もあるとの認識であった。「三角縁神獸鏡」の大部分は日本製と考えているが、その祖型が中国にあったことは十分に考え得るからである。

ところが西川寿勝氏に同行した全国邪馬台国連絡協議会会長の鷺崎弘明氏のプログ(1)に詳細な写真がでているのを見て驚いた。どうも鍔の発生状況が不自然なのである。そして、西川寿勝氏の講演記録(2)も調べてみた。まず、鷺崎氏の写真の鍔の部分を拡大した写真1を見て頂こう。

金属の専門家としてこの写真を見ると、波文帯(二重折線)の両側の鋸歯文帯(三角模様)に沿って生成した「濃茶色の鍔コブ」が気に入らない。「鍔コブ」の上面には緑鍔が付いているので銅の鍔らしいが鉄管でもあるまいし、青銅鏡に濃茶色の「鍔コブ」は奇異である。

もちろん、銅の鍔には酸化第一銅(赤褐色)や酸化第二銅(黒色)もあり、濃褐色を示すので、専門家としてうかつなことは言えないが、



写真1 洛陽鏡の流れるような銹コブ

この種の酸化物は表面に被膜を作り腐食を防止する役割を担っていて、「銹コブ」を形成するメカニズムになじまない。ただし、西川氏が「中原の出土鏡特有の硬くて厚い赤サビ」とコメントしているし、張懋鎔氏も、典型的な北方の土中で発見された銅鏡は「全体が赤い斑点と緑銹に覆われる」と述べている(3)ので、「銹コブ」がこれに該当するのかも知れない。

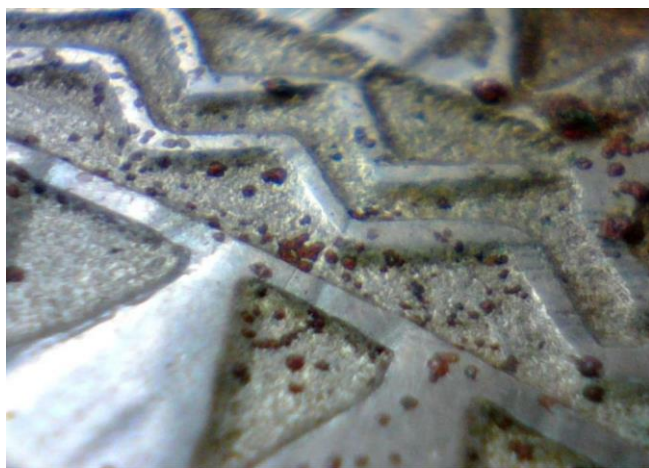


写真3 波文帯の孔食2



写真2 波文帯の孔食

そこで、「銹コブ」の周りを更に高倍率で観察したのが写真2である。銹のない波文帯の部分に小さな孔食が見られ、それが発達したのが「銹コブ」のように見えるのである。念のため、更に西川氏の写真により別の個所の写真3を準備した。これらを見れば、小さな孔食から中段階の孔食を経て「銹コブ」に至る過程が了解できるであろう。どうやら、洛陽鏡には孔食が発生しているのである。

ところで、青銅鏡の場合、合金成分に錫を含むので通常なら、表面に茶黒色の酸化皮膜を形成して緑銹を防止する。しかし、腐食性の湿潤環境になると、錫と銅の酸化皮膜が破られ、緑銹を生じるようになるが、この緑銹でも以降の銹の進展を防止する効果がある。したがって、多くの三角縁神獸鏡が二千年近く経ても、ひどい「銹コブ」などないのが普通なのである。

ところが、湿潤環境に塩化物を含むようになるると局所的な孔食を起こして、小さな「銹コブ」をつくり、その部分は、マクロセルという現象によって局所的に腐食を進行させてしまう。

はたして、このような孔食が日本の青銅鏡に発生していたであろうか。日本で出土した

三角縁神獸鏡やその他の青銅鏡の腐食状況をカラー写真やネットで観察して見た。

まず、樋口隆康『三角縁神獸鏡綜鑑』(新潮社)のカラー写真八面を見るが、茶黒色皮膜が緑錆で覆われていて、金属光沢が残るとか、洛陽鏡のような典型的な「錆コブ」はみられないし、孔食状の起点もみられない。『椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡』(京大博物館図録)の一〇面を見ても、ほぼ同様で、腐食が進行したと思われる部分は、錆部が脱落して虫食状の緑白色となっている。更に、一般的な青銅鏡の写真を多く載せる田中琢の『古鏡』(講談社)の一〇〇面余りを見るが状況は変わらない。ただし、これらの写真は印刷物で高倍率の観察には耐えられないので見落としているかもしれない。

そのため更に、ネット上で国立博物館の「e 国宝」(4)に載る四〇面ほどの青銅鏡を高倍率で観察してみた。その結果は、外周部(三角縁部)だけに、虫食状の腐食が進展している場合もあるが、洛陽鏡のような「流れ錆コブ」は見当たらなかった。

器を古物に見せかける贋作技法」として、意識的に「孔食」を発生させた疑いはないのか。もちろん、私が贋作技法をよく知っているわけではない。ただ、金属材料の耐食性を評価する際に、何十年もかかっている研究が進まないの、「加速試験」をするのはごく一般的なことである。その方法の代表的なものが、塩化物を含む環境で湿潤と乾燥を繰り返す試験方法なのである。

その意味では写真1〜3に示したように、鋸歯文帯や波文帯の部分に金属光沢がそのまま残っているように見えるのも奇異である。更には銘文帯の部分は、孔食さえ見られず、あたかも銘文が読みやすいように配慮されているかのようなのである。

すなわち二千年近く経ったのに、ほとんど腐食してない部分がある一方で、紋様面の反対側の研磨された「本来の鏡面」はなぜか、全面にわたり濃茶褐色の錆がついている。同じ加工表面(切削・研削・研磨面)でありながら、なぜかくも錆の発生が異なるのであろうか。

更に写真観察中に気付いたのは、銘文帯の中央に、極細のコンパス線状の疵が残っている

ことである。このように細い線をどのような方法でケガいたのであろうか。

腐食の一般論から云えば、孔食は応力腐食割れよりも厳しい腐食環境で起きる。応力腐食割れとは素材に力がかかった状態で弱い腐食環境に置かれると錆も出ないのに割れてしまう現象である。いまだ、考古学界では青銅鏡における応力腐食割れ現象について理解が進んでいないが、破断してしまったり、ひび割れしている青銅鏡はかなりの数に上る。

孔食環境というのは、応力腐食割れ環境よりも厳しい環境である。従って、孔食環境に千年以上も放置されて、銘文がはっきり読めたり、金属光沢が残っていたりするのは私にとって奇異なのである。そこに「贋作技法」を疑う理由があるが、はたして私の思い過ごしであろうか。

もちろん、日本の土壌と華北洛陽の土壌の腐食性には差がある。周知のように、日本の土壌は「酸性土壌」で人骨や鉄遺物が腐食してしまい残り難い。その一方で、華北は「アルカリ土壌」で、一般的には腐食は少ない。

ただし、洛陽は塩分の濃化があり、それが今回のような腐食に繋がった可能性は否定しきれない。

以上で、洛陽鏡の不自然な「鍔コブ」についての記述はとりあえず終える。ただ、私が金属専門家の立場で、「洛陽鏡は贋作か」などと云うと、それを鵜呑みにする方が出るかも知れない。そのため、まずは「独断と偏見」をモットーとする『史遊会』に紹介してみたのである。

ついでなので、鷺崎氏と西川氏の記述の中に次のようなコメントがあったので付記する。

① 鉛同位体比の測定用のサンプル採取を王趁意氏に依頼したが、「もつと上のレベルでの日中合同プロジェクト」で実施したいと断られた。

② 鏡の様式は第Ⅱ期〜第Ⅲ期に属し、卑弥呼が貰ったと考えられる第一期の鏡ではない。なお、従来日本製と考えられていた仿製三角縁神獣鏡について、これも「魏鏡」と考える研究者が増えているとのこと。

③ ただし『魏鏡説』の旗頭、大阪大の福永伸哉教授も「日本から後世に渡った可能性もある」と云っているし、同じく『魏鏡説』の京都大の岡村秀典教授も「本場に洛陽からの出土品か分からず、確かな出土地の議論が今

後必要」と、出所が不明の三角縁神獣鏡には慎重である。

- (1) <http://zenyamaren.org/washizaki.html>
- (2) <http://zenyamaren.org/nishikawa20151224.pdf>
- (3) 張懋鎔「洛陽で発見された三角縁神獣鏡について」『博古研究』33(2007)
- (4) <http://www.emuseum.jp/>

『史遊サロン例会』

例会開催は原則として、奇数月（一月、三月、五月、七月、九月、十一月）の第三土曜日、午後三時〜五時。

会場は銀座ルノアール貸会議室（東京駅八重洲北口・外堀通り横断徒歩三分、S M B C日興證券並び、電話〇三三五七七八八九、中央区八重洲一七四）。

例会では、話題提供（講演や直近の『史遊サロン通信』掲載）の後、懇談と云うスタイルになると思います。

なお、五月の『サロン例会』は第二土曜日の十四日に変更になっています。ご注意ください。

また、『史遊サロン』への参加は、『史遊サロン通信』の読者としてのみの方も歓迎しております。『史遊サロン通信』の送付を迷惑な方は、恐縮ですがお知らせ下さい。